Ⅰ　学校の概要

（１）地域の特性

葛川の地は、滋賀県南西部に位置する大津市の北部にあり、東に比良山系、西に丹波山地に挟まれ、その昔葛川谷と呼ばれた安曇川上流の渓谷に沿って位置している。四季折々の変化を感じることができる豊かな自然に恵まれた地域であり、標高５９１ｍの花折峠を越え、国道３６７号線いわゆる「鯖街道」沿いに、南より平・坂下・木戸口・中村・坊村・町居・梅ノ木・貫井・細川の９つの集落が点在し、北は高島市に、西は京都市に接している。

地場産業として、かつては山林を生かした炭焼きや平安期よりの木地師の伝統を受け継ぐ木地職・木挽職など木材を利用した産業があったが、時代の流れと共に衰退してきた。このため、職を求めて郷土を離れていく若者や家族が増えていき､過疎化と児童数減少が大きな悩みとなっている。平成元年度より、山村留学制度（若鮎留学）を導入して、小・中学校の活性化を図ってきたが、現在山村留学生は在籍していない。また、京都市左京区の久多地域よりの通学生（平成２６年４月現在７名）がいる。京都市の久多地区は京都市の北部に位置し、葛川地区と同様に過疎化が進んでいる。

保護者をはじめ地域の人々は、学校に対して協力的であり、学校と共に子どもたちを育てていこうとする思いが強い。

（２）児童・生徒の実態

本校は、２級へき地指定校であり、学区は広く全員がスクールバスで通学している。保育園・小学校・中学校が同一敷地内にある利点を生かして、保・小・中の交流や合同授業・合同行事を積極的に行い、教職員全員で児童・生徒を育てていこうとしている。子どもたちは、明るく素直で自然を愛し、何事にも真面目に取り組むことができる。自主性も育ちつつあるが、少人数であるため依頼心がやや強く、対外的な場で十分に力が発揮できないなどの課題もある。

（３）教育目標

＜小学校＞

豊かな自然とふるさとを愛し、知・情・意・体の調和のとれた人間性豊かな子どもを育てる

考える子　　がんばる子
やさしい子　　元気な子

＜中学校＞

豊かな自然とふるさとを愛し、明日を拓く

知恵を育てる（自己教育力）
心を育てる（思いやる心・実践する心）
夢を育てる（健康と体力）

（４）学級編制及び教職員数

小学校　１年１名　２年３名　３年１名　４年４名　５年２名　６年４名の計 15 名、３年と４年は複式学級編制とし、全５学級である。教職員は中学校との兼務を含めて 12 名である。

中学校　１年２名　２年２名　３年４名の計８名、複式学級はなく全３学級である。教職員は小学校との兼務を含めて 16 名である。

Ⅱ　研究の概要

（１）研究主題

子どもが楽しく学び合うための小中学校の一貫的な教育のあり方

～児童生徒の連続的な学びと伝え合う力の育成をはかるために～

（２）主題設定の理由

研究の主題を設定するにあたり、本校の小中学生の特性、課題を以下のようにとらえた。

◆指示されたことや言われたことはきちんとやりきれるが、まだまだ指示を待ったり、行動の確認をとったりするなど教師頼りのところがある。

◆授業中、教師との一対一のやりとりが多く、友達同士で話し合ったり、やりとりをしたりすることが苦手である。

◆自分で考えて答えを出したり、説明したりするのが苦手である。

これらの実態から、葛川小中学校がめざす児童・生徒像の実現をめざして、以下のように研究のねらいを定め、研究主題を設定した。

【葛川小中学校がめざす児童・生徒の姿】

１，　課題への興味関心を高め、受け身にならず自分の考えを持つ児童・生徒

２，　友だち同士の関わりを通して、学びを深める児童・生徒

３，　自分の考えと比べながら聴いたり、相手を意識して伝わるように話したり表現したりする児童・生徒

【研究のねらい】

□同一敷地内にある小規模校の特色と強みを生かし、小中連携して学力や人間性の向上を図る。

□小・中の一貫的な教育を通して、「小１プロブレム」「中１ギャップ」を克服し、中学生活や学習へのなめらかな接続をめざす。

□小中の教育課程の内容の系統性、指導の継続性を見直し、効果的な指導法をめざす。

これらのねらいを達成するため、小中の連携を一層深め、９年間を一貫的に見通した観点と指導体制をもった学校づくりを進めていきたい。

○小学校５、６年生からいくつかの教科で教科担任制を導入し、小・中の接続期においてきめ細かく指導するとともに、中学校の教科担任制や学習内容にスムーズになじめる状況をつくり出す。

○小中の教科の間で系統性や指導の継続性を見直し、ペア学習、グループ学習を通して自分の考えを伝え合う共同的な学びを取り入れ、より効果的な指導体制や指導内容を作り出す。

○保小中合同の行事（運動会や紅葉祭）を通して、児童生徒の交流と活動の一貫性を深める。また、小中合同の活動の中で、年齢に応じた社会性やリーダーシップを養う。

○小中合同研究授業や合同授業（小中合同体育、小中合同合奏、小中合同書き初め会）を通して、児童生徒はもちろんのこと、小中教職員の交流と意識改革をめざす。

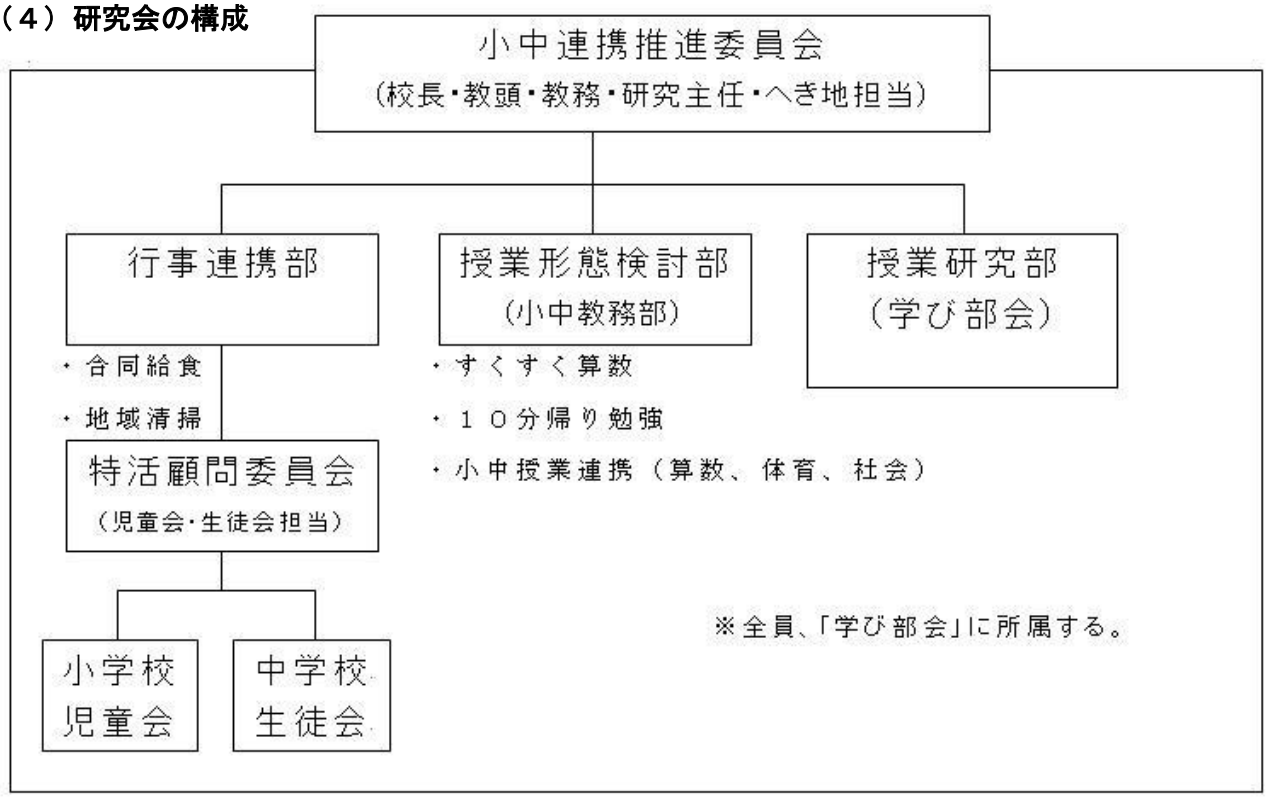
（３）研究の仮説

○少人数である本校の特色を活かし、児童・生徒一人ひとりの実態に応じて、あらかじめ与える課題を工夫したり、予想されるつまずきを想定して学習活動を組み立てたりすることで、より適切な学習課題を設定することができ、児童・生徒たちが意欲的に課題解決に取り組むことができるであろう。

○共同的な学習の手法を用いて「学び合い」の学習形態をとることで学習の広がりや深まりがはかれると考えた。そのために、教師が子どもたちの考えを「聴き」「つなぎ」「もどす」役割を担い、考えをさらに広げたり深めたりできるであろう。

○友だちの話を聞いたり、自分の考えを持つためには、日常の言語活動を充実させることが必要である。各教科の授業の中で言語活動の充実を意識した授業づくりを数年前より工夫し、学習の約束、行事や全校集会での児童・生徒の表現活動の場の設定などに取り組んだ。このことも「学び合い」学習、自分の考えを持ったり相手に伝えたりする力の育成につながるであろう。

（４）研究会の構成



Ⅲ　研究の実際および成果と課題

1　授業研究部～<u>学びのスペースを活用した授業</u>～

（１）　小中学校で一貫した授業スタイルの導入

本校では、今年度より校内に授業研究部を「学び部会」として設置した。この部会では極少人数の中でも、子どもに自分の考えを伝え、さらに仲間の考えを聞いて、それをもとに自分の考えを深めたり、高めたりする力を身につけさせることを目的としている。その手法として、小中学校のすべての教室後方に大机を設置し、その場所を学校内で共通した「学びのスペース」として授業に活用している。本部会の研究として極少人数

学級における「学び合い」に焦点を当て、子どもの思考力、判断力、表現力の向上を図りたいと考える。今年度は、1 学期に小中学校それぞれ 3 回ずつ研究授業を行った。研究授業においては小中の教員による事前研究会・授業研究会・全体会を実施した。また、本研究のアドバイザーとして、愛知文教大学の倉知雪春先生を講師にお招きし研究を深めてきた。

（２）　各研究授業の内容と成果と課題

○中学校３年生の実践（数学科）　平成 26 年 5 月 15 日（木）　実施

・授業内容

単元名　『多項式』(数の性質と式の利用)

本単元では、多項式の展開や因数分解ができるようにするとともに、文字式を利用できる場面を広げ、文字を用いて数量関係を一般的に表すことや、見通しを持って式を扱う力を身につけさせたい。そして、自分自身で説明を書きながらその内容が論理的な説明になっているかどうかを他の学習者と比較したり交流したりしながら判断できる力をつける場を葛川中の「学び」の機会と捉えたい。そのために、４人が１つの机で基礎の課題と発展の課題に取り組む形をとり、本単元では４月当初より８回ほどこの学習活動を取り入れてできるだけ話し合いに慣れることからスタートさせたが、話し合いにはなかなかなっていない現状がある。

本時は、整数について成り立つ性質を見つけ、文字式を用いて証明できることを目標として授業を行った。また、授業展開は、式の展開や因数分解を利用して、数の性質を一般的に証明する際に自分自身で説明を書きながらその内容が論理的な説明になっているかどうかを他の学習者と比較したり交流したりしながら判断できる力をつけられるように組み立てた。

・授業の考察

本授業では、愛知文教大学の倉知雪春先生を指導講師に招き、アドバイスをいただいた。事前研究会で指導案を検討した結果、当初の授業展開を変更し、ジャンプの課題をぬいて基礎の課題のみにしたが、基礎の課題でもつまずきがあった。また、これまでに数回「学び合い」のスペースを活用した授業をしてきたが、これから学び合いの授業形態に慣れていく段階であり、普段よりも話し合いに勢いがなかった。また、授業者自身にも「学び合い」の授業スタイルに戸惑いがあり、課題の出し方に工夫が必要であると感じた。そのためには、具体的な展開や操作、作業をしながら授業にインパクトやテンポを持たせ、付箋のような「動かせる」アイテムや説明を授業の中に組み入れていかなければならないと考える。

また授業後の研究協議会では、「生徒が話し合いに行き詰まったとき、毎回止めるのではなく最後まで見守ってもよかったのではないか。」「無理に 4 人で話し合わなくても男女 2 人ずつで相談させてもよかったのではないか。」「変わらない固定メンバーの中でどのように「学び」を深めていけばよいか。」等の貴重な意見が出された。

○小学校 5・6 年生の実践（音楽科）　平成 26 年　5 月 29 日（木）　実施

・授業内容

題材名　いろいろなひびきを味わおう

教材名　ラバース　コンチェルト（デニーランデル・サンデーリンザー作曲）

本教材は、４つのパートに編曲されており、各パートの楽器を自由に選択できるようになっている。主旋律、副次的な旋律、響きをつくる和音、響きを支える低音というパートの役割について子どもたちが話し合いを通して考えを深め、主体的な聴き合いや試行錯誤の活動をしながら楽器演奏や楽器選びを学び合う最適な教材として選んだ。

どの児童も音楽が好きで、楽器の演奏も楽しんですることができる。しかし、技術的な差が大きく、できない児童が「できない」「わからない」といえることは児童の学び合いを深めるために大切である。

本教材ではパートに分かれて練習したり演奏したりするが、パートを離れて教え合ってもよいことを告げ、みんなで合奏をつくりあげることを考えた。

互いの楽器の音色を聴き合いながら、主旋律を中心とした響きになるように、音量のバランスや演奏の仕方を工夫すること、前時までにみんなで書き込んだ楽譜を見ながら、音量のバランスや演奏の仕方について気づいたことを話し合いながら、自分たちがめざす演奏ができるようにすることを本時の目標とした。

・授業の考察

授業の第一の反省は、授業の導入部分で各パートの演奏練習の時間を取らなかったことである。前時までに各パートの練習を充分行っていたとはいえ、授業研究という緊張の中、ほとんど練習せずに演奏が始まったため、どの子どもも緊張が高まってしまった。そのため、子どもたちが本来の演奏ができ、演奏について気づいたことを自由に話し合うことができるまでに時間がかかってしまった。

始めに各パートで演奏練習をし、緊張をほぐしておけばもう少しのびのびと演奏できたり、演奏について気づいたことを早い段階で話し合えたのではないかと感じた。

話し合いの場面では、授業の内容に興味がなければ気持ちが散在してしまう児童にあえて進行役を任せ、全員が参加できる風土の中で学び合うことができたのはひとつの成果である。その児童主導の展開になってしまうことも心配したが、普段の授業の中でも自分の意見や考えを言うことに児童たちは慣れているため、一人の児童が引っぱっていくのではなく、お互いに意見を言い合いながら演奏を進めることができた。

今後は、極少人数の中でどのような学び合いができるかを追求することが課題である。子どもたちは、年間を通じて１人から４人の極少人数で学習をしている。子どもたち一人ひとりの特性をお互い理解していることはよい点であるが、固定的な人間関係であることは否めない。そのようなつながりの中で子どもたちの学びをどのように深めていくのか、広げていくのかを常に考えていく必要がある。そのために教師がどのような役割を持たなければいけないのかをこれからも考察していきたい。

〇中学校１年生の実践（社会科）　平成 26 年 6 月 19 日（木）　実施

・授業内容

単元名　『世界の諸地域～アジア州～』（アジアと日本のかかわり）

本時は、アジア州の国々と日本との関わりを理解し、今後の日本の課題について考えることを目標として授業を行った。授業展開は、提示した課題に対して生徒それぞれが異なった資料を読み取り自分なりの答えを考え、その後、自分の読み取った内容や考えを学びのスペース

でお互いに交流し合いながら課題解決にむかうように組み立てた。
　実際は、自分が資料から読み取った内容と、課題との関係に気づくことができなかったり、自分の考えを相手に上手く伝えられることが出来ずに学び合いが停滞したりする場面が見られ、停滞を打破する為に教師が介入し教師が主導することになることが多かった。
・授業の考察
　本学級の二人は、普段から自分の意見を話したりすることは苦手である。そのためどうしても学び合いが活性化しにくいことが大きな課題であった。
　そのため、本時は学び合いを活性化させることをねらいとし、生徒一人ひとりに提示する資料を異なるものを読み取らせ、情報交流の場をつくったが、結果として子どもの中で自分の考えがあっているのかどうか自信がないために上手く話すことが出来なかった。そのため本学級では一つの資料を二人で考えていく方が学び合いがやりやすかったといえる。
　また、資料の提示においては、初めから全ての資料を提示してしまうと資料を読み取ることに集中し、課題とのつながりが見えにくくなる。そのため、一度にすべての資料を提示するのではなく、子どもたちの学びの深まりに応じて少しずつ資料を出していく方が効果的に資料を使えることができると考えられる。
　付箋や短冊などを利用することにより学び合いが深まることもある。そのため資料等の工夫に加えて、学び合いの方法についても今後研究していく必要があるといえる。

〇小学校３・４年生の実践（社会科）　平成 26 年７月　１日（火）　実施
・授業内容
　単元名　『わたしたちの大津』（身の周りの施設について調べよう）
　本単元は、まず身近な地域の特徴を見極める学習から始まる。その後、学習範囲を大津市内へ広げていく。子どもたちが話し合いながら地図を作ったり、考えを出し合ったりと学び合いを多く取り入れてきた。自分たちの住んでいるところとは違う市内の様子を学習していく中で、葛川や久多にもみんなのための施設が集まっているところがあることに気づいた。そこで、本時は、発展学習として葛川・久多の出張所と駐在所について扱った。２カ所の施設を比べ、似ている所や違う所をあげ、そこから出る思いや疑問など、自分の考えをもち、発言しあうことを学び合いとした。授業展開は、まずペア（２，３人）で２カ所の似ている所と違う所を短冊に書いた。その後、みんなの意見を一枚の模造紙にまとめた。そこからグループで、模造紙から気付くことや感想を話した。最後に振り返りシートで今日の授業で分かったことや感想を書いた。
・授業の考察
　事前に「駐在所」をテーマに同じ流れの授業を展開したことで、子どもたちが授業の流れを分かって参加することができた。ペア学習とグループ学習を取り入れることで、子ども主体の活動が多い授業が展開できた。
　＜ペア学習について＞
　短冊に意見を書くことで、授業がスムーズに流れたが、一人ひとりの作業になってしまっていた。自分の資料があれば、お互い話す必要もなく書くことができたからである。資料や短冊と、教師が用意をしすぎてしまったことで、子どもたち同士の学びの時間がなくなってしまった。
　そこで、事前にまとめ資料を用意しなくても、子どもたちの記憶の中で話せばいいということ、ペンを１本にするなどして、子どもたちが話す環境を作ることなどの改善点が挙げられた。
　＜教師の位置＞
　グループ学習では、大きな机に児童が座り、教師もその輪に加わった。児童の意見に共感したり、意見が言えない子に話を振ったりしようと考えたからである。しかし、今回の授業では

児童が教師に話しかける場面が多く見られ、子どもたち同士の学びの場面が少なかった。教師は一歩引き、児童が困った時に資料を出して手助けしたり、児童同士を「つなぐ」役割に徹したりと、『我慢』が今後の課題となった。

〇中学校 2 年生の実践（国語科）　平成 26 年 7 月 10 日（木）　実施

・授業内容

単元名　「豊かな言葉『言葉を選ぼう』もっと伝わる表現を目ざして」

本単元は、類義語の「言葉の違い」を分析するという、言語事項に関する学習のための教材である。文章の読解では、使われている言葉によって、そこから読み取ることのできる意味が異なる。自分で表現する場合においても、どの言葉を使うか吟味することは、重要である。このことから、ここでの学習は、あらゆる表現の基礎になると言える。生徒同士による考えの交流を通して、類義語の「言葉の違い」を分析することで、的確で幅広い語彙を獲得させ、豊かな表現力を身につけさせたいと考えた。

本時は、具体的な使用例から、似た意味の言葉の共通点や相違点をとらえることを目標として授業を行った。まず初めに、類義語の存在を思い出し、「見る」動作に関する言葉集めをした。その後、集めた言葉の中から二つ選び、その共通点・相違点について考える活動を二度、異なる言葉の組み合わせで行った。共通点・相違点について考える際は、これまでの自分の生活体験をもとに、具体的な用例を交流しながら考えるという授業展開にした。しかし、片方の生徒の発言がほとんどで、もう一方の生徒はほとんど発言することなく、他の生徒の発言を聞くばかりとなり、生徒同士が考えを交流する場面を実現することは難しかった。

・授業の考察

本学級の生徒は、積極的に発言をするが、お互いに意見を聞いた後に交流し合うということはあまりしない。そこで、教師が間に入って二人の意見をつなぐ役割を果たそうとした。しかし、一方の生徒が自分の意見を引き出せず、発言に消極的になったため、もう一方の生徒は教師に交流を求めるような学習活動になってしまった。

生徒同士で交流し、学び合いをするためには、まずそれぞれの生徒が自分の意見をもつための材料を用意する必要がある。今回の授業では、言葉の具体的な使用例を考え、そこから言葉の共通点・相違点を考えるように指示したが、具体的な使用例をあまり出せなかった。そのことから、自分の意見をもつための材料が不足していたのだと考えられる。そのような生徒のためには、あらかじめ言葉の具体的な使用例を複数用意し、つまずいたときに提示するのが良いだろう。

また、共通点・相違点を考える際の「視点」が明確ではなかったことも、生徒同士の交流がうまく進まなかった理由の一つであると考えられる。「見る」動作に関する言葉には、言葉の違いとして「気持ち」「見る時間」「意図」「目つき」等の違いが挙げられるが、実際の授業の中でこれらの視点に生徒自身が気づく機会は少なかった。あいまいなままだと意見を出すことが難しいので、これらの視点を先に示しておくと、生徒が考える際の手助けになると考えられる。

学び合いの学習として、生徒同士で意見を深めることを期待しているが、まだまだ教師を頼りにしている様子が見られる。教師と距離をとって、お互いを頼りにして学習できるように、

今後も研究を進めていく必要がある。

〇小学校１・２年生の実践（生活科）　平成 26 年 7 月 11 日（金）　実施

・授業内容

単元名　『ふしぎたんけん　ふれあいたんけん』

本単元は、子どもたちにとって一番身近である自分たちの住んでいる町を探検する活動が中心である。学習指導要領の内容（３）「自分たちの生活は、地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。」の学習である。内容（８）には「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさがわかり、進んで交流することができるようにする。」と書かれているが、子どもたちは「くたたんけん」に続き、「ぼうむらたんけん」に出かけ、地域の人々や場所とかかわる活動を中心に学習を進めていく。今までの探検で出会った地域の人々や場所とかかわりを深めたり、新たな場所や人々との出会いでかかわりを広げたりする中で、地域のよさに気付き、自分たちが生活している地域の人や場所への愛着を深め、学習活動を通して地域の人々と適切に接したり、地域で安全に楽しく生活したりしようとする態度を育てたいと考えた。

本時は、地域を探検する「ぼうむらたんけん」の活動を通して、自分が興味をもったことや、見たこと、聞いたことなどから心に残ったことを表現することができる、地域に出た活動を振り返り、気付いたこと、感じたことなど、自分なりに表現することができることを目標として授業を行った。

授業展開は、“ぼうむらのことをみんなにしらせるために”子どもたちが集めた資料をもとに、発表の方法を工夫しながらまとめるように組み立てたが、教師が同時に二つの指示を出し、子どもたちはどうすればよいのか戸惑う部分も見られた。やりたい活動と教師の意図との間にズレが生まれ、児童に対しての発問や関わり方の課題があげられた。

・授業の考察

授業者と１・２年生の児童の意図することにズレがあったように思われた。指導案に固執せず、児童の反応を見ながら教師の動きも変わっていくべきであった。また、同時に二つの違う指示を出してしまったが、１・２年生の子どもたちにとっては、難しいことであるので一つのことに集中させる方がよかったと考える。

子どもたちが活動の中でやりたいことをできるように、教師は様々な想定をし、それに対応する場や物の準備ができるとよかった。学び合いには教師の発問が大切になってくる。「子どもが考えやすい」「子どもにとってわかりやすい」発問を吟味することが大切であり、その場に応じた発問を考えなくてはならない。子どもたちが受け身でなく、能動的に学び合いができるとよかったと思う。話し合うということは、子どもたちの“気付き”から始まるものであるが、子どもたちは不安になることもあり、教師の出番が重要になってくる。教師は信号機のような役割を担わなければならないのではないか。少人数だからこそ発表や発言することに勇気がいるだろう。だからこそ、授業の前の段階でいかに子どもたちに自信をもたせることが重要となる。

２　授業形態部～<u>葛川小学校・中学校が連携して授業形態に改善を加える</u>～

（１）授業形態に改善を加えるねらい

〈課題〉	〈めざすもの〉
・受け身の姿勢で授業を受ける子どもが多い。 ・学級の人数が　１名～4名である。 ・教職員数が少なく、ダイナミックなアイデアが生まれにくい。 ・体験的でダイナミックな授業を展開することが難しい。	・保小中が同一敷地内にあることを生かし、保小・小中が合同で学習する場を設けることで授業を活性化させる。 ・各教職員の得意領域を生かした授業づくりをする。 ・教職員の協働意識を醸成する。

（２）日課表の工夫

小学校児童・中学校生徒共に、学年の枠をはずして更に効果的な学習を組み立てるために、それぞれが作成していた時間割（日課表）に工夫を加えた。

中学校の教師が小学校で授業をしたり、その逆を実現したりするために、揃える部分を作った。単位時間が小学校 45 分、中学校 50 分のため、平成 23 年度は１・２校時を揃えた。

しかし２・３校時を揃える方が機能的であるため、平成 24 年度以降、上の表のような日課表で運用している。

（３）授業連携の経緯

【算数・数学】中１ギャップを減少させることをねらいとして中学校の数学教師が特別講師として小学校の算数の授業をした。子ども側にとっては、入学後、顔なじみの先生に中学校数学を教えてもらえる安心感が持てた。また、数学教師にとっても児童の特性や児童理解につながり、効果があった。（平成２２年～）

【社会】小学校 5、6 年社会科に中学校社会の教師が適切な単元で授業をした。打合せも十分行い効果が上がった。（平成２５年～）

【音楽】紅葉祭（文化祭）に向けて小中合同合奏の取り組みを開始した。「小中学校の児童生徒・教職員を加えた大編成で合奏し、大勢の前で発表する機会を与える」ことをねらいとした。保護者・学校協力者会議委員・地域住民を前にして演奏し、大変好評であった。以後現在に至っている。（平成２３年～）

【体育】年度当初に小中教員が計画を立て「ボール運動領域」で合同授業を行った。小中合同水泳にも取り組んだ。（平成２４年）合同授業を行う単元の計画や単元目標を小中ですりあわせをして、より充実した授業が実施できた。（平成２６年）

（４）授業形態の検討・改善でわかったこと

①単元や学習活動を精選し、学年の枠をはずしてより多くの人数で学習活動に取り組むことは授業に活気をもたらし、有効である。

②小学生に対して、中学校教員の専門性を生かした授業は、スペシャルなものになり、あこがれを持たすことができる。

日　課　表（にっかひょう）

	時　　刻
すくすくタイム	８：３５～　８：５０
朝の会	８：５０～　８：５５
１・2時間目	８：５５～１０：３０
長休み	１０：３０～１０：４５
３・4時間目	１０：４５～１２：２０
給　食	１２：２０～１３：００
昼休み	１３：００～１３：３５
そうじ	１３：３５～１３：５０
５時間目	１３：５０～１４：３５
６時間目	１４：３５～１５：２０
帰りの会	１５：２０～１５：３０

日　課　表　大津市立葛川中学校

朝の時間	8：20～ 8：35
連絡	8：35～ 8：40
1校時	8：45～ 9：35
2校時	9：45～10：35
3校時	10：45～11：35
4校時	11：45～12：35
給食	12：35～13：00
休憩	13：00～13：35
5校時	13：35～14：25
6校時	14：35～15：25
掃除	15：25～15：35
終学活	15：40～15：50

③小学校教員の授業から中学校教員がよりきめ細かな「子どもの特性を把握した授業づくり、発達を捉えた授業づくり」を学ぶことができる。

④極少人数の葛川小中学校においては、学びのスペースを活用し授業に変化をつけることが、子ども達にコミュニケーション力や社会性を育む点から有効である。

⑤小中学校の教員が実際に他校種間で授業を行ったり、参観したりすることは教師の指導力向上に役立つと共に、「中一ギャップ」の解消につながる。

（５）課題

教職員スタッフが少ない中、前年度と同様の授業形態を組むことができない場合がある。そのために、授業形態を工夫する「ねらい」を全教員で共有し、どの教科でも「ねらい」を達成できるように、弾力性のある計画の中で、無理なく実施するための工夫が必要である。

３　行事連携部　<u>～小学校と中学校が役割分担する行事連携から共に創り出す「共創」の行事連携へ～</u>

（１）行事連携を工夫した経緯

本校の運動会は、以前より保育園・小学校・中学校と学区体育協会が合同で開催していた。また、紅葉祭（文化祭）は保育園・小学校・中学校が学区住民に招待状を出し、園児・児童・生徒の舞台発表や作品展示物を鑑賞してもらっていた。

あらかじめ役割分担が決められており、運動会は小学校がイニシアティブをとり、紅葉祭（文化祭）は中学校がイニシアティブを取って、大まかな役割分担で機能的に進められていた。

当時から、児童・生徒が「受け身的であること」「中学卒業後、葛川から進学したとき、高校や社会の中でつぶれないか・・・」などが話題となっていた。そこで行事の中で児童・生徒がより活発で主体的に活動する力を育むため児童会と生徒会が「共創」できる場の工夫をすることとした。

（２）児童・生徒に主体性を持たせ、自分たちで創りあげる行事へ

①　同じ行事で、発達段階ごとにつけたい力の検討（**生徒会・児童会顧問会議**）

小学校と中学校が一つの行事を単に役割分担して実施する運動会や紅葉祭（文化祭）から、行事に対して小学生や中学生に主体性を持たせ、自分たちが創りあげる行事へと改善するために、まず、小学校児童会顧問と中学校生徒会顧問の間で各行事における活動を通して小学生につけたい力、中学生につけたい力とそのねらいについて小中の教員が顧問会議を持ち、共通認識する場を設けることとした。

※4/4 から年度末まで計 9 回開催予定

②　小学生と中学生が意見交換し合う場の設定（**小中合同会議**）

小学校教員と中学校教員がつけたい力やねらいについて共通理解した後、「小中合同会議」（小学校児童会役員と中学校生徒会役員で組織）において、企画を進めさせるというステップを取った。

このことで、小学生と中学生が共に運動会応援合戦や紅葉祭を創りあげるという感覚を味わわせることができ、達成感が得られたと考える。

※ 5/2 から 10/1 まで計 6 回開催

③　合同給食会、地域清掃、KT ふれあいの輪等の行事を通して

☆　合同給食会

普段から保育園児と小学生と中学生は同一場所（ランチルーム）で給食をとっている。しかしその時間帯が校種により若干異なるので給食の時間に交流できているわけでもない。

そこで、年間 3 回（最近は回数やバリエーションが増えつつあるが）は、保育園児と小学生・中学生が一緒に食事をし、

その後①食に関するクイズ（保育園担当）②運動会応援合戦の色に分かれて色ごとのめあてづくり（中学校担当）③卒業卒園する人たちへの給食クイズ（小学校担当）をして交流を楽しんだ。

☆　地域清掃

以前は、小中学生が、「梅の木」、「坊村」「木戸口」の３つのグループに分かれゴミ拾いをしていた。ゴミがあまりなく、また、一つのグループの人数が少ないため、「小中学生みんなで地域をきれいにした」という達成感が得られにくくなっていた。

そこで、昨年度の 12 月は明王院周辺の落ち葉拾い、本年度は葛川診療所～葛川自然の家周辺の除草作業をすることとした。

全員で同一エリアを清掃することにより、児童・生徒にも目に見えてその成果がわかり、子ども達は達成感を得られた。また、地域の方や支所長、自然の家所長からもお褒めとお礼の言葉をいただき、地域と一体となった活動に改善することができた。

日　時：平成 25 年 12 月 5 日(木)
場　所：葛川明王院
内　容：落ち葉かき

日　時：平成 26 年 7 月 2 日（水）
場　所：葛川診療所～葛川少年自然の家周辺
内　容：除草作業

☆　KT ふれあいの輪

- **「児童生徒が学習したり体験したりしたことを地域の人に発表することを通して、多くの人の前で発表する力を身につける。」**
- **「児童生徒の住む（葛川　KaTsuragawa・久多　KuTa）地域の方々とふれあい、地域の一員としての自覚を持つ。」**

上記をねらいとしてＫＴふれあいの輪を実施した。

日　時：平成 26 年 1 月 8 日（水）
場　所：葛川市民センター
内　容：①　体験発表　②　料理づくり教室　③　懇話会（葛川・久多の将来について）

小学 5､6 年、中学 1～3 年生が、地域のみなさんに修学旅行、校外学習、職場体験等の体験発表をした。地域の方に自分の思いを発表する機会が少なかった小中学生にとって、よい機会とすることができた。

また、小学 1～4 年生は、「健康推進協議会」の方と料理づくり教室（カレーづくり）を行い、地域の方とのふれあいを深めた。

「懇話会」では、「葛川や久多の将来」について、グループごとに話し合いを深め、地域の方と一緒に、地域のことを考えるよい機会となった。

（３）今後の行事連携のありかた

保小中の学校間行事連携のありかたの検討から始めて、児童生徒と地域との連携（地域清掃、KTふれあいの輪）を視野に入れて行事連携の改善を進めた。

「KT ふれあいの輪」については、今後も児童生徒が地域の方々と共に考え合いたい地域の課題（防災マップづくり、避難訓練、町おこし・・・等）についてテーマを決めて、実際の話し合いの中で地域とともに考えを深め合いたい。そして、今後も改善を加えながら学校と地域が共に創り出す取り組みを進めたい。